丹羽文雄文学全集　第二十八巻

親鸞 Ⅲ

文雄文学全集

講談社

丹羽文雄文学全集　第二十八巻

親鸞Ⅲ

一九七六年八月八日　第一刷発行

著　者　丹羽文雄

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社

東京都文京区音羽二丁目一二番二一号・郵便番号一一二
電話　東京(〇三)九四五一一一一一・振替八東京三九三〇

印刷所　信毎書籍印刷株式会社

製本所　株式会社小島製本所

定価は箱に表示してあります

落丁本・乱丁本はお取替えいたします　(文1)
©丹羽文雄　一九七六年　Printed in Japan

目

次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

親鸞Ⅲ……7
親鸞紀行……283
仏にひかれて……325
創作ノート……409
年譜・著作目録……419

装幀　辻村益朗
（写真・一九七六年）

丹羽文雄文学全集　第28巻

親鸞Ⅲ

親

鸞

Ⅲ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

方便

「本願寺聖人親鸞伝絵」は、永仁三年（一二九五）本願寺三世の覚如が、親鸞の行実とその徳をあらわすために、その一代の行状を記したものに図画を挿入したものである。信州康楽寺の浄賀が、その画を描いた。親鸞歿後、三十四年目であった。史伝とみるよりはむしろ親鸞の徳を顕揚し、宗義をしめすことに重きをおいたものであった。

浄土真宗系の本山や末寺は、毎年報恩講開催のときこの「伝絵」をかかげ、その物語の「御伝鈔」を朗読して、参詣の人びとに親鸞の行状をしらしめることになっている。

「その文章甚だ優美、辞藻真に雅麗にして、人の之を朗読するや、聴衆をして自然の間に祖徳の宏大無限を感想せしむべき明文を以て成れるもの——此の書成りて本願寺繁栄の基礎方に成立すといふも恐らくは不可なからん、真宗の繁昌は遺弟の念力より成ずといふと雖も遺弟の念力の由て来れる本は祖徳にあり、而して其の祖徳を顕揚せるものは覚如の報恩講式、親鸞伝絵……」

と、「真宗全史」に書かれているくらいである。

しかし、覚如の努力がはたして親鸞の意にかなったことであったろうか。

「木像よりは画像、画像よりは名号」

と、つねに口にしていた親鸞であった。それなら親鸞の意に反して、宗派を確立しようとした覚如は不肖の曽孫となる。しかし、一概に覚如ばかりも責められないのだ。宗派確立の原因を、親鸞自らが蒔いていたのだ。もっとも親鸞には、すこしもそうした下心はなかったであろう。歴史というものの動きは、親鸞にもわからないことであった。

六十三歳のとき親鸞が再び京都にかえるまでに、「教行信証」の草案は出来ていた。

七十一歳、七十二歳のとき「高僧和讃」、「浄土和讃」の草案が出来た。

八十歳にして、「文類聚鈔」が出来、八十一歳のとき、「愚禿鈔」の草案が成った。

「入出二門偈頌」「浄土三経往生文類」「尊号真像銘文」「一念多念文意」「唯信鈔文意」「如来二種廻向文」「弥陀如来名号徳」それに八十四歳から八十五歳までのあいだに、「西方指南抄」を書いている。帰洛後九十歳にいたるまで、関東北陸の信者に出した消息で現存するもの四十三通に達している。手紙の類はともかく、親鸞の著作はその

ころすでに存在していたのだ。そのことが、浄土真宗なる教団を確立する基礎となった。もし親鸞が一冊の著書もなかったと仮定するならば、親鸞が歴史的に存在したことまであやしいものになったであろう。

道元の著作にくらべたならば、親鸞の作はすくない。しかし、後世教団を確立するには十分であった。明恵高弁も、著作が多かった。しかし、高弁からは新しい教団は生れない。もっとも高弁は日本における華厳宗の再建者であったせいもある。高弁は既成の宗教に忠実であった。空也は、念仏をひろめたが、教団をつくるまでにはいたらなかった。一遍は踊念仏をすすめ、全国を歴巡し、捨聖とも称されて、道俗の信者が群れをなして従った。時衆の開祖であるが、曹洞宗や日蓮宗や浄土宗や浄土真宗ほどの教団にはなれなかった。すでに法然や親鸞が存在していたので、一遍のかげがそれだけうすかったこともあるだろう。

蓮如は、「教行信証」と「歎異鈔」と「御伝鈔」をもって、浄土真宗の三つの柱とした。それによって教団が成立した。一遍は著作をしなかった。わずかに「語録」と「播州問答集」と、その「絵伝」が残されているにすぎない。親鸞が著作をしなかったとしても、その語録は弟子たちによって書かれたであろう。伝絵もつくられたであろう。しかし、それだけでは浄土真宗成立の強力な要因とはならなかったはずである。親鸞は自分が死んだら、死体は加茂川にすててくれ、魚にくわせてくれといったが、その書いたものは、親鸞が亡くなったあと親鸞にとって代った。寺もいらぬ、経も要らぬ、ただ六字の名号があればよいのだと、九十年の生涯を親鸞は通した。が、死後は本人の意に反した存在としてまつりあげられることになった。しかし、そのたねを、親鸞自身が蒔いていたのである。親鸞の布教が本格的に行われたのは、東国に移住してからであった。二十年近い布教で、万を越える信者を得た。しかし、もし著作がなかったならば、親鸞の教えは歴史の波の中に消えてしまったかも知れない。道元は興聖寺や永平寺を建てた。法然は承元の法難で、一躍歴史に残る存在となった。親鸞も流罪となったが、その他何人かの受刑者の内のひとりという扱いであった。親鸞とともにそのとき流罪となって伯耆に流された禅光房、佐渡に流された行空房、伊豆に流された好覚房、備後に流された浄聞房たちの消息は、その後杳として知られていなかった。親鸞もまた、生死不明の扱いをうけたにちがいないのである。その著作のおかげで親鸞は歴史に残ることになった。

親鸞が東国で布教していたころから、高田門徒、横曽根門徒、荒木門徒などと集団に発展する要素はみとめられたが、親鸞の帰洛後は、それを契機として各教団がはっきりと形成されるようになった。その中で、高田門徒は、いまの栃木県芳賀郡物部村大字高田に拠る教団として、真仏を

中心として次第に大きな存在となった。真仏の後に顕智、専空らと相承して、門流がさかえることになった。ついに高田派と称する一派が生じた。後年高田派は、三重県津市一身田に移った。東国の門徒の中では、高田派だけが大きくなり、その他の門徒は歴史の波間に消えてしまったようである。

高田派の教団が成立して数年経つと、近江国木辺にひとつの教団があらわれた。

その起源は、親鸞が東国より京に戻る途中、嘉禎元年（一二三五）四月下旬、木辺の天安堂に滞在して、他力往生の教えを説いたからというのである。そのとき木辺の村主の石畠資長が親鸞の弟子となり、出家して顕明と号した。親鸞が帰洛後は、その教えを宣布するようになった。その後愚咄慈空らが相続して、近江伊勢等の地に多くの信徒を得て、ついに木辺派となった。

が、親鸞が帰洛の途中布教をつづけたとは考えられない。念仏禁止に追われている身であった。かえりの途中でいくらも布教してもよい機会はあったが、避けて来たはずである。が、あるいは要請をことわりきれずに天安堂で話したかも知れない。念仏禁止の命が出ているとはいえ、のんびりとした当時の情勢である。早馬をとばしたところで京から鎌倉までは五日もかかるのだった。が、石畠資長は帰洛途中の親鸞を知り、後日五条西洞院に通うようになったのではあるまいか。

東国時代とはちがい、世間をはばかっていたにしろ、親鸞は帰洛後も有縁の人びとを教化していたのだ。京に戻ってから三十年近くも生きていた。

さて覚如作の「親鸞伝絵」は、

「それ聖人の俗姓は藤原氏、天児屋根の尊、二十一世の苗裔大織冠の玄孫、近衛大将右大臣従一位内麻呂公六代の後胤、弼の宰相有国の卿、五代の孫、皇太后宮大進有範の子なり。しかあれば朝廷につかへて霜雪をもいただき、射山にわしりて栄花をもひらくべかりし人なれども、興法の因うちにきざし、利生の縁ほかにもよほししによりて、九歳の春のころ、阿伯従三位範綱卿、前大僧正の貴坊へ相具し奉りて、髪を剃除し給ひき。範宴少納言公と号す……」

親鸞の履歴を最大限にかざりたてた。浄土真宗の開祖が、貧乏公卿の出であり、幼いころから伯父のもとにひきとられ、果ては生活と出世のために叡山に送りこまれたなどと正直に書くことははばかられたのであろう。われは漁師の子と日蓮は堂々と告白した。われは貧乏公卿の子供だったと親鸞が告白してくれなかったのは、残念であるが、親鸞はおのれの出生に関して、日蓮ほどの関心もなかったのであろう。この世にひとりの人間として生れたということだけを問題にした。

まことに「親鸞伝絵」は、その文章は優美であり、雅麗

である。下巻の第五段には、

「聖人故郷にかへりて、往事をおもふに年々歳々夢のごとく幻のごとし。長安洛陽のすみかも、あとをとどむるにものうしとて、扶風馮翊ところどころに移住したまひき。五条西洞院わたり、これひとつの勝地なりとて、しばらく居をしめたまふ」

この文章では、親鸞をとりまいていた現実的な日々の不安を想像することは出来ない。親鸞は霞をくらって生きていたのではなかった。念仏禁止のあおりをくらって生きていたのである。肉親と別れ別れにならなければ、生きていけなかった。

「このごろいにしへ、口訣をつたへ、面授をとげし門徒等、おのおの好みをしたひ、路をたづねて参集したまひけり」

弟子たちが五条西洞院にあらわれていたのは、事実であった。東国の弟子や、帰洛後に出来た蓮位のような弟子や、木辺の願明のような弟子が出入りしていた。しかし、稲田時代のような聴聞者が多く集まるということはなかった。

「親鸞伝絵」の下巻の第五段には、平太郎という東国の信者のことが書かれている。後に平太郎聖教という双紙が出たが、それは愚昧の筆であり、問題にするほどのものではないが、親鸞に関する平太郎の物語が、世間に相当流布したのは事実であった。「伝絵」の中の物語を親鸞が聞いたならば、当惑したであろう。どこまで事実があったのか、不明であるが、この物語が念仏と神明に関係したことだけに、流布する一般性をもっていた。

常陸国那荷西郡、大部郷に、平太郎なにがしという庶民がいた。親鸞の教えを信じて、ふたごころなく念仏を唱えていた。あるとき、くだんの平太郎が所務にかられて熊野に詣することになり、ことのよしを尋ねるために五条西洞院の親鸞のもとに来た。

所務にかられてと「伝絵」にあるが、高田派の「親鸞聖人正統伝」によると、

「地頭の役にさされて、紀州熊野神社に詣ける」

とある。が、「通俗絵入親鸞聖人一代記」によると、

「当時、常陸の領主佐竹左衛門尉季賢は毎年一度ずつ熊野へ参詣することになっていたのであります。そのとき臨時人夫というものを領内から取立て、それをつれていったものです。いま平太郎もその徴発にあたった一人であったのです」

通俗物語の方が平太郎の立場をよく表現している。一向専念に念仏をしている平太郎にとっては、熊野に参詣することが大きな問題であった。

「平生上人のご化導をいただき、弥陀一仏に帰し、余仏余菩薩に心をかけるなと仰しゃっているのに、今度領主さま

のご用で熊野に参詣することが、もしや雑行や雑修になりはせぬか、未来の邪魔になりはせぬか、万一これが往生の邪魔になるのではないかと心配です。たとえ領主さまのおとがめがあっても、お断わりしなければなりません。困ったことが出来ました」

と、平太郎は親鸞に正直に話した。もし親鸞が、それはいけないといえば、平太郎は熊野にいかぬ覚悟であった。そのとき親鸞は、わが浄土真宗のありがたい教えを平太郎にあらためて説いた。

「それ聖教万差なり、いずれも機に相応すれば巨益あり。但末法の今時、聖道門の修行においては成ずべからず……」

と、ひとくさり聖道門と浄土真宗のちがいを説明しているが、覚如がわが宗派の主張宣伝のためには、親鸞にことよせて、ことさらむつかしい専門的な言辞を並べる必要もあったようである。

「しかるに、このたび熊野へ参詣するのは、自分から発起するところでもなく、何か祈誓があって参るのでもないから、一向に念仏を唱えているそなたが、公務にしたがって熊野に詣るのは何ら苦しいところではない」

と、親鸞がさとした。

「それに熊野権現は、本地は阿弥陀如来であるから、ただひとえに本願を信じて、あながち威儀をとりつくろう必要もない。水垢離や火忌みなどする必要はないのだ。そのことが決して神明を軽んずるということにはならないのだ」

平太郎は安心して熊野に詣ることになった。道中は念仏三昧、目に不浄のものを避けたり、水垢離などする必要もなく、心中ひそかに本願を仰いでいた。領主一行は無事熊野に着いた。一家一門は拝殿につめ、通夜をすることになったが、平太郎だけは祈りもせず、念仏を唱えていた。

旅のつかれから平太郎は眠った。すると、夢の中に証誠殿の扉を押しひらいて、衣冠をつけた俗人があらわれた。証誠殿とは、熊野権現本宮の名前である。平太郎に向って、

「汝なにゆえわれを軽んずるや。不浄にして参詣するや」

平太郎はすくみあがった。そのとき、忽然と親鸞があらわれた。「通俗絵入親鸞聖人一代記」は、このあたりはなはだ庶民的に描写されている。忽然としてあらわれた親鸞聖人は、権現さんに対坐して、

「これこれ、権現殿いかり給うな。かれは親鸞が教えによって念仏をするものである」

権現さんはにわかに顔色を和らげて、平太郎の前までお出になり、笏を正して、敬屈の礼をあらわし、いまははや何事もいう必要はないというようすであった。そこで夢がさめた。

「やはり権現さまは本地極楽の阿弥陀さまにまちがいない。神明の本意ただ念仏の一法にあることをお知らせいた

だいたのだ。ありがたや、ありがたや」

京都に戻ると、さっそく五条西洞院の親鸞を訪ねて、くわしく夢の話をすると、親鸞が落着いて、

「いかにもそのとおりだ」

と答えた。

「不思議の事なりかし」

と、「伝絵」は書いている。

本地垂迹をはたしてどこまで親鸞が信じていたのか。超歴史的な本体が歴史的な姿（迹）となってあらわれる（垂）ことだが、具体的には仏あるいは菩薩が、人びとを救うためにこの世にさまざまな姿となることを意味する。中国では、儒教の聖人や道教の神などについて本地垂迹が説かれていた。日本では、神道の神についていわれた。神は本地としては仏であるというのである。この世に迹を垂れたものという神仏習合の思想であった。熊野権現の本地が、阿弥陀如来である。世間では、堅くそう信じられていた。

迷信を信じない親鸞は、余神余菩薩を排斥した。神仏習合の思想を信じていなかった。熊野権現の本地が阿弥陀如来などと信じていなかった。まして平太郎にそんなふうに説教はしなかったにちがいない。

平太郎なる人物がはたして存在したか、それは不明である。が、平太郎が抱いた疑問には、一般性がある。本願を信じ、念仏を唱える人間が、神に詣ってもさしつかえないのかと疑うのは素朴な人情である。

親鸞は、儒教の人道主義をみとめていた。儒教の説くところは正しい。しかし、それはあくまで世間の善であるといった。仏教は絶対的なものである。絶対的な真理に対して、余の教えはすべて邪教である。仏教と外教とは、どこまでも区別されねばならないのである。仏教と他の教えとの差別は、絶対的である。そのことを先ず知らねばならないのだ。

その区別を知っておれば、熊野権現の本地が阿弥陀如来という本地垂迹を借りる必要もないのである。神を敬うことが善いことになるなら、遠慮しないで参拝するがよいのである。しかし、それはあくまで世間の善にとどまる。世間の善を否定することもないのである。

「九十五種みな世を汚す。ただ仏の一道のみ、ひとり清閑なり」

と、善導もいっている。道には九十六種あるという。そのことを心得ているなら、どのような神に詣ろうと、差支えはないはずであった。「親鸞伝絵」の著者である覚如は、平太郎の事件で本地垂迹の思想を借りなければならなかったが、革新的な親鸞の思想は、容易に理解されない当時の情勢にあったのであろう。

「伝絵」の平太郎の件は、不思議の事なりかしで終っているが、「通俗親鸞聖人一代記」では、素人らしい疑いを持

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com